

非F I Tで託送するソーラーシェアリング、小田原市に誕生 ファイナンススキームのモデルを開発

小田原では行政、企業のほか市民によるエネルギーの取り組みもある。その一人が小山田大和さん。合同会社小田原かなごてファームを設立し、耕作放棄地を活用した営農型太陽光発電（ソーラーシェアリング）を開発。直近では3基目となる発電所を、固定価格買取制度（F I T）を使わずに完成させた。小山田さんは信用金庫と信用保証協会のタッグによる融資を実現し、これにより「全国で同様のモデル開発ができるのでは」と期待する。

——小田原との関わりは

小山田 20歳のときに小田原のまちづくりに参加したのがきっかけで、それまで縁はありませんでした。鈴廣蒲鉾本店の副社長でエネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議（エネ経会議）代表理事の鈴木悌介さんとの付き合いもここからです。その後小田原市に引っ越し、耕作放棄地の解消をテーマに、みかんを栽培する「おひるねみかん」やソーラーシェアリングの開発を行ってきました。最近では既存の電力網を活用して電力を全量自家消費するソーラーシェアリングを完成させ、経営する「農家カフェ SIESTA」で自家消費しています。

地域経済循環など悌介さんが掲げる理念に共感し、過去にはエネ経会議の事務局長も務めさせてもらいました。

今は別々のアプローチで地域貢献活動を行っていますが、目指す方向は同じだと思っています。

——小田原はどういった場所か

小山田 歴史・文化のあるまちで、知名度もあります。エネルギーに関しては、経済界、行政、市民それぞれの取り組みがあり、どれか1つ、2つが取り組んでいる地域はあっても、3つすべてが行動を起こしている地域は珍しいのでは。

ただ、歴史があるゆえの必然とは思いますが、様々な活動をする上で人間関係や政治的なしがらみに巻き込まれていった実感はあります。若者が自由に活動できる地域に変わってほしいと思います。もちろん小田原にも若手経営者はたくさんいます。ただ、私は市

民活動家から起業しており、背景の違いからによる差異もあるとは思いますが、「地域の重鎮」と呼ぶべき人の意識が硬いと感じます。若手に魅力ある小田原になるには、この部分の変革は必要だと思います。

——コロナ禍でのスタートとなったカフェの状況は

小山田 以前からカフェを持つことは夢ではありましたが、正直なところソーラーシェアリング開発当初には計画にありませんでした。地産地消を実現すべく供給予定先の湘南電力と協議を進めましたが、お互い事業者の立場でするので、理念だけでは折り合いがつかみませんでした。

実はそのころ、既に環境省の補助金を申請しており、「開発しないわけにはいかない」という状況でもありました。なので、自家消費の需要として以前からの夢だったカフェを持つことを決め、それから約1年でソーラーシェアリングを建設し、2021年1月にカフェを開店しました。メニューには、おひるねみかんのほか足柄牛や早瀬のひもの（小田原の干物店）さんのアジなど地産地消にこだわっています。私がこれまで取り組んできた耕作放棄地解消の取り組みの2つ「おひるねみかん」と「ソーラーシェアリング」に加え、地産地消という理念も融合した集大成のカフェとも言えます。

場所は国道255号線沿いですが、この道はトラックが多く、あまり観光客が通らないので最初からメインターゲットにしていませんでした。地元の方や私が以前から親しくしていた



だいている方に来店いただき、開店から4カ月は事業計画以上の数字となっています。「開店バブル」のようなものもあると思うので、これから一見さんをいかに増やすかが課題です。近くには田畑もあり、農業を感じてもらえる場所だと思います。

——ソーラーシェアリング事業について

小山田 私にとって3基目のソーラーシェアリングです。直流77.8kW、交流49.5kWの低圧発電所で当初工事費は1,885万円(資材込み)でした。このほか接続負担金は213万円と安い場所ではありませんでしたが、報徳思想を唱えた二宮尊徳先生の生まれ故郷である栢山桜井村、しかも洪水を防ぐべく松の木を植えた逸話もある酒匂川のすぐそばの場所です。土地の下には石があって、追加のスクリー工事に220万円かかりました。農地は現在、複数の地元の方などに貸しています。このほかカフェ開業資金として300万円を投資しました。

発電所の設計は千葉エコ・エネルギーさんにお願しました。以前に台風で倒壊した2基目の再建を助けていただいたこともあり、信頼できる会社に依頼しました。施工はアーネスト合同会社で、千葉県匝瑳市のソーラーシェアリング建設などで実績があります。先行する千葉県の取り組みを、神奈川に輸入する形となりました。

この発電所は非FITかつ既存送電網を活用して託送するという、前例のないソーラーシェアリングです。その重要性を鑑みて、難しくても意味のある土地にこだわりました。

ファイナンスをつけたのは特に画期的だと思っています。通常、太陽光発電はFITが事業性の担保になります。そのため、始めに複数の金融機関に話をしましたが、彼らは前例を重視するので、融資してくれたのは横浜銀行1行、金額は100万円と、実現にはまったく足りませんでした。そこで城南信用金庫に相談したところ、神奈川県信用保証協会を巻き込んでそれぞれ600万円ずつ融資してくれました。環境省の補助金も660万円あり、資金調達が実現しました。返済は17年で終える予定です。

つまり、前例ができたということになります。信用保証協会は全都道府県にあるので、各地域の信用金庫などと協力すれば、私の案件という前例から、どこでも同様のスキームで資金調達ができるはずで。これがソーラーシェアリング普及の一手になればと期待しています。

実はカフェだけでは全量自家消費できません。そのため補助金要件を確認すると、公共施設への供給も可能となっていました。そこで私が以前、バイオマスボイラ導入プロジェクトを行った松田町に相談すると、町の指定



小山田さん

た。エネ経会議の事務局長を辞めたのは、先に述べたしがらみに関することなのですが、正直掛け持ちしていたら今回の件は実現できませんでした。

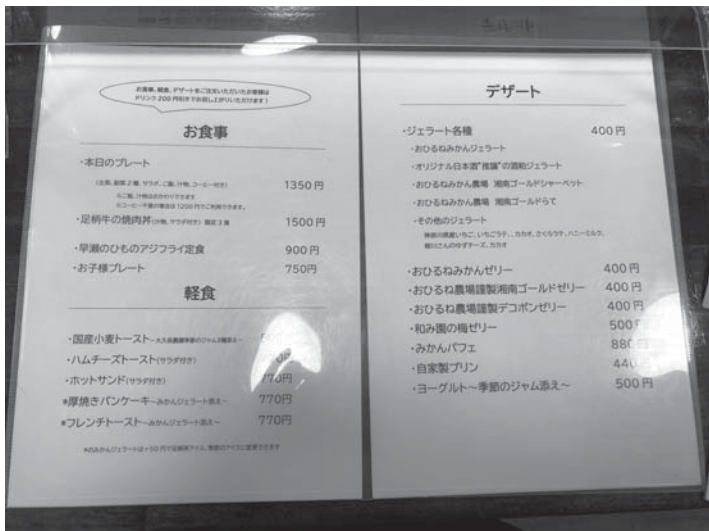
カフェに来店される方は多くて20人といったところです。例えばランチ+ドリンクで1,500円程度で提供していますが、カフェを経営してみて「3万円を稼ぐのがこれほど大変なのか」というのが率直な感想です。エネルギーに意識を集中させていたころは再エネや地産地消の正しさにばかり目がいていましたが、日々の暮らしで精一杯の方々には簡単に共感してもらえない、ということをもっと理解しました。

その日の売上に一喜一憂しながらの日々ですが、農業や1～2号機の売電収入、コンサルタントや講演、行政書士の資格もあるので、それ関連の仕事も受けて生計を立てています。幸いなことに、おひるねみかんのジュース、加工品や、2基目のソーラーシェアリングで栽培した米を使った日本酒「推譲」の販売が好調です。

アフターコロナの世界こそ、「食料」「エネルギー」「福祉」に加え「お金」を地域で確保・循環できる仕組みが大切だと考えており、今後も市民として様々な取り組みを考えています。

——実現しての感想は

小山田 正直もう二度とやらない、という位、忙しい一年でし



農家カフェSIESTAのメニュー。地産品が多い